

●外交時評

金日成訪中の問題点

中嶋領雄(東京外国語大学助教授)

◆ —

そのようなとき、金日成主席一行の訪中であつただけに、その結果には内外の大きな注目が集まつた。去る四月二十八日に発表された中朝声明は、双方の戦鬪的友誼(き)をたたえ、「討議したすべての問題について完全に意見が一致した」と述べているが、そこにはいくつかの重大な不一致が残されているように思う。

そもそも、中ノ対立下の中朝関係は、これまでも必ずしも順調ではなかつただけに、今日の

ブノンベン陥落に次ぐサイゴンの無条件降伏によつて、アジアの情勢は急激に旋回した。大國間の勢力均衡を基軸とする緊張緩和外交が、地域紛争の現状凍結にはまつたく無力であつたことが証明されたばかりか、アジアの内発的な民族主義的エネルギーの前に、アメリカの「公約」はもはや何らの意味をも持たなかつたことが明白になった。しかも、今日の国際情勢がきわめて鋭敏な連動的性格を有しているだけに、インドシナ半島から朝鮮半島への危機の連動性

ような重大な情勢下で訪中した金日成主席一行にたいする北京の歓迎ぶりは、きわめて盛大なものであり、金日成主席はこのような中国の応対にたいし、四月二十七日の出境時に車中から特別の感謝電報を送っている。だが、これら一連の「儀式」を行わなければならなかつたことこそ、双方の不一致の反映のような気がする。

この共同声明はすぐには発表されず、四月二十八日になつて、二十六日付のものがようやく発表された。しかも、声明には双方にとつて重



大な懸案であつた経済協力問題について直接の言及がなく、中国側が金日成主席歓迎宴(四月十八日)での鄧小平演説でもしきりに強調したいわゆる「覇権」問題にはまつたくふれなかつたし、また、北朝鮮側がこれまでしばしば言及し、七〇年の中朝共同声明では最も重要な柱であつた「日本軍国主義」および日米安保体制への非難も、今回は消えていた。金日成訪中の近いことが伝えられるところからすれば、経済協力問題ではさしたる進展がなく、「覇権」問題は北朝鮮側が難色を示し、対日批判については

中国側が、今日の日中関係と日米安保体制許容の立場から難色を示したものと推測できよう。

そして、最も注目すべき朝鮮半島の統一問題では、四月十八日の北京における金日成演説が「南朝鮮で革命が起これば、われわれは一つの民族としてそれを見ているだけではおれず、積極的に支援するであります。……万一、敵が無謀にも戦争を起すすれば、……この戦争でわれわれが失うものは軍事分界線であり、得るのは祖国統一であります」と述べて、明らかに「武力統一」を示唆したにもかかわらず、中国側は共同声明で「金日成主席の提出した自主的平和的統一」を支持する旨をあえて強調している。

◆ —

中国としては、朝鮮半島が再び動乱に陥り、中国自身が犠牲に供されること、今秋のフォード訪中をひかえて米中関係の進展にこそ関心があれ、朝鮮半島の情勢によつて米中関係にき裂が入ることは避けたいこと、そのような朝鮮半島の流動化は、北東アジアにおけるソ連の影響力を増大させるであらうこと——などから、インドシナ半島との連動作用による朝鮮半島の流動化を現段階では望んでいないのであり、この点にこそ、両者の最大の不一致があつたように思われる。

あえて「意見の完全な一致」をうたわざるを得なかつたゆえんではなからうか。